

2026年5月21日

Tiny Plastics, Big Problem: The Hidden Risks of Plastic Pouches for Baby Food

「プラスチック製パウチに入った ベビーフードに潜むリスク」

GREENPEACE

要旨

プラスチック製のスパウトパウチ入りベビーフードが市場に登場してから、まだ20年も経っていない。しかし、その圧倒的な利便性から「注ぎ口付き」パッケージは瞬く間に普及し、今や世界中の乳幼児の食生活を一変させるほど主流の存在となった。その一方で、新たな研究結果は看過できない懸念を投げかけている。大手食品企業が販売するこの軟包装プラスチックに入ったベビーフードが、最も脆弱な存在である乳幼児の健康を脅かしている可能性が浮き彫りになってきたのだ。

グリーンピース・インターナショナルが2025年にノルウェーの海洋技術開発機関・SINTEFオーシャンに委託した調査では、世界的な消費財メーカー2社（ダノンおよびネスレ）のベビーフード製品からプラスチック粒子が検出されたことがわかった。本調査は、パウチの内側に使用されているプラスチック素材（ポリエチレン）と、検出されたマイクロプラスチックの一部との間に関連があることを示唆している。また、両社の容器包装と食品の双方から、プラスチックに関連するさまざまな化学物質の存在が示された。

これらの調査結果は、乳幼児が日常的にマイクロプラスチックや容器包装由来の化学物質に暴露している可能性を示す、これまでの一連の研究結果を改めて裏付ける形となった。成長の過程にある赤ちゃんの身体や臓器は、こうした物質の影響を特に受けやすい。

主な調査結果

SINTEFオーシャンが、ダノンの「Happy Baby Organics」ブランドおよびネスレの「Gerber」ブランドのプラスチック製スパウトパウチ入りベビーフードを対象に行った調査で、以下のことが明らかになった。

- 食品1グラムあたり、ダノンのHappy Baby Organicsフルーツピューレでは平均で最大99個、ネスレのGerberヨーグルトピューレでは平均で最大54個のマイクロプラスチック粒子が検出された。
- 商品1個あたりでは、ダノンのHappy Baby Organics 1パウチにつき計11,000個以上、ネスレのGerber 1パウチにつき計5,000個以上の粒子が含まれる計算になる。

調査対象となった商品

- ネスレ「Gerber」 Fruits Puree, Yogurt & Whole Grains, 12+ Months, Banana Blueberry 99グラム
- ダノン「Happy Family Organics」 Happy Baby, 6+ Months, Apples, Blueberries, & Oats 113グラム



今回の調査では以下の点も暫定的に確認された。

- パウチの内側に使用されているプラスチック素材のポリエチレンと、検出されたマイクロプラスチックの一部との関連性。
- ネスレのGerberブランドの食品および容器包装から、人体に有害な可能性のある化学物質を検出。
- 両ブランドの容器包装および食品から、プラスチックに関連する多数の化学物質を検出。

論点

- 本調査では、加熱などをしない通常の使用条件下でもプラスチック容器からマイクロプラスチックやナノプラスチックが食品中に放出されることが確認されており、曝露（ばくろ）リスクが広範囲に渡ることを示唆している。また、ある最近の研究では、ベビーフード入りのプラスチック容器を電子レンジで3分間加熱するだけで、推定で最大400万個のマイクロプラスチック粒子が放出される可能性があることが算出され、また別の容器では容器包装の表面積1平方センチメートルあたり最大20億個のナノプラスチック粒子が放出された（注1）。ベビーフードの容器包装から溶け出す数十種類の化学物質も特定されており、その多くは有害である可能性のある「非意図的添加物質（NIAS）」である。たとえ微量であっても、乳児期という発達上の重要な時期においては、内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）への曝露は生殖器系、成長、代謝、そして赤ちゃんと子どもの将来の健康に多大な影響を及ぼす可能性がある。
- プラスチック製スパウトパウチは、現在、世界で最も普及しているベビーフードの容器包装である。2031年までに年率8.18%で成長する最も勢いのある容器包装であり、容積ベースで2025年のベビーフードの世界市場のうち37.15%を占めている。それに加え、プラスチック包装の中で最も問題が多く、汚染の原因となっている多重容器包装の市場も、全体で2035年まで年率5.3%で成長すると予測されている。

- マイクロプラスチックやプラスチックに関連する化学物質がベビーフードに含まれている可能性を示す兆候はすべて、乳幼児の潜在的な健康リスクを未然に防ぐために、直ちに対策を講じるべき「警鐘」と受け止めるべきである。ネスレやダノンなど小売チェーンのプライベートブランドや、その他の中小企業などを含むプラスチック製の食品接触製品を販売するすべてのブランドは、自社製品が消費者を、健康リスクを引き起こす可能性のあるマイクロプラスチックやプラスチックに関連する有害化学物質に曝露させていないことを証明するため、早急の実態調査を実施しなければならない。
- 各国政府は「予防原則」に則った行動をとっていない。マイクロプラスチックやプラスチック由来の化学物質に関する現在の科学的証拠は、乳幼児のプラスチック関連の汚染物質への曝露を劇的に減らし、最終的には根絶するために、国際的および国内的な予防措置を講じることが正当であることを証明している。マイクロプラスチックの研究はまだ途上段階にあるが、「不確実であること」は「安全であること」を意味しない。

食品容器包装に含まれるマイクロプラスチックや有害化学物質への規制は、人々の健康を守るものになっておらず、特に乳幼児の脆弱性が考慮されていないのが現状だ。企業は容器包装の検査や安全性について、透明性をほとんどもしくは全く確保しないままプラスチック包装のベビーフードの販売を拡大し続けている。現在、世界ではプラスチック汚染対策に関する国際条約の交渉が進められている。有害な容器包装や化学物質の排除およびプラスチックの生産・販売の削減を軸として、各国政府は、人々の健康を守るために予防原則に基づいた、協調的な措置を講じなければならない。

(注1) Kazi Albab Hussain, Svetlana Romanova, Ilhami Okur, Dong Zhang, Jesse Kuebler, Xi Huang, Bing Wang, Lucia Fernandez-Ballester, Yongfeng Lu, Mathias Schubert, Yusong Li ”[Assessing the Release of Microplastics and Nanoplastics from Plastic Containers and Reusable Food Pouches: Implications for Human Health](#)” (2023年6月21日発表)

<免責事項>

本文書は、公教育および科学研究を支援し、報道を促し、環境保護に対する意識を高めることを目的にグリーンピースが作成した。本文書は、情報の共有、環境保護、公共の利益のみを目的とし、投資その他の判断材料となるものではなく、目的外利用があった場合、グリーンピースはかかる利用に伴ういかなる責任も負わないものとする。本文書の内容は、グリーンピースが調査期間において独自に入手した調査情報にのみ基づくものであり、グリーンピースが本文書に含まれる情報の適時性、正確性、完全性を保証するものではない。